

山王



御 挨 拶

宮 司 宮 西 修 治

ここ数年、「御朱印」に対する人々の関心が高まり、まさに「ブーム」と呼べるほどの勢いを見せています。書店の店頭には多くの御朱印関連の本が平積みされ、日枝神社の御社頭にも、御朱印帳を手にした多くの方々が訪れる中、特に女性の姿が目につきます。

東京五社めぐりや遠近の七福神めぐりなどに併せて、その地のグルメスポットを訪ねることも忘れず、仲間と共に和気藹々と巡拝を楽しむ姿に、信仰に基づく旅―かつてのお伊勢参りや大山詣を見る想いがして心が和みます。

そしてまた、昨年の申年を契機として境内末社の猿田彦神社でも、まさに「ブーム」といつてよいほどの賑わいが続いています。ふた月に一度の「庚申祭」には、昨年こそ及ばないものの毎回八十名近くの方々が参列され、休日ともなればお詣りはひきもきらず、「猿田彦神社で御祈禱を受けられないか」との要望にお応えして庚申の日に一回二十名限定で始めた特別祈禱もほぼ毎回予約が埋まるという状況の中、猿田彦大神様の「道開きの御神徳」を仰いで参詣される方もまた、男性よりも女性のほうが圧倒的に多いことに気付かされます。ブームの牽引車はいつの時代も女性、ということなのかもしれません。

いっぽう御社頭を見わたせば、若い世代の方々が境内に入る前に門の前で軽くお辞儀をし、また手水舎で作法どおりに手と口を清め、正中を避けて参道を進み慎ましく拝礼する姿は「ブーム」ならぬ、大きな「ムーブメント」として敬神の念が広い層に浸透しつつあることの表れであるように思え、嬉しさと同時に頼もしさを感じます。特に、お詣りされた方々の多くから「こんな都心に、厳かで静かな空間があるとは思わなかった、心が洗われる思いがした」との言葉を聞くにつれ、我々神職は、この心のオアシスともいえるべき聖域を謹んでお守りしなければならぬと強く思う毎日です。

今年も山王祭が近づいてきました。本年は鳳輦神輿の渡御がない、いわゆる「陰祭」の年、氏子各町の此処彼処で神賑わいとして神輿渡御が行われる「本祭」を「動」の年とすれば、「陰祭」は「静」の年ともいえますが、六月七日の末社八坂神社例祭から始まる十一日間、各種の祭典や奉祝行事が行われることは例年同様で、「静」の年ではあっても境内では心踊る太鼓の音や、耳に懐かしい「神楽囃子」が響き渡ります。一人でも多くの方々がこの杜に詣で、瑞々しい「神気」を体感されるようお願いして止みません。

平成二十九年 山王まつり 行事日程

六月

七日(水) 十一時

末社 八坂神社例祭

十日(土) 十一時

表千家家元献茶式

十一日(日) 十一時

境内茶園 狭山新茶奉納奉告祭

十三時・十四時・十五時

同 稚児行列

十六時半

同 第二十九回奉納剣道大会奉告祭

十三日(火) 十一時

撰社祭

同 十八時

宵宮祭 並 献灯祭

十四日(水) 十八時

献灯祭

十五日(木) 十一時

例 祭

― 皇城鎮護・都民平安祈願祭 ―

同 十八時

献灯祭

十六日(金) 十一時

煎茶礼道日泉流献茶式

同 十三時

山王嘉祥祭

十七日(土) 十時

裏千家家元献茶式

八日(木) 十二時十五分

ミニコンサート「にっぽんの歌」

十三日(火)

山王音頭と民踊大会

十五日(木)

日比谷高校箏曲部奉納演奏

十七日(土) 十三時十五分

〈神賑諸行事〉 麗月流 佐藤汀恵社中・龍生派 栗田草泉社中(生花展) 松本源之助社中・若山胤雄社中(神楽囃子) 宗偏流 細田宗栄社中・裏千家永井宗圭社中(野点御茶席) 日泉流野煎席、狭山茶茶席、嘉祥祭菓子接待席 他

特別寄稿



参議院議員

山谷えり子

私が子供の頃は、日本は小さな島国と教えられてきましたが、わが国は六千八百五十二の島々からなり、うち国境離島だけでも五百三十二もの島があります。

国境の島々から二百海里（約三百七十里）は排他的経済水域として主権が及ぶところとされています。

三年前、私が海洋政策・領土問題担当大臣の時に、所有者不明の島々の所管の省庁を決定し、全国の中学校に海洋面積世界第六位の領土と海が描かれた日本地図も配布しました。やつとこのことで、本年三月に我が国の領海等を根拠付ける無人離島四百三十一島のうち、所有者がない離島二百七十三島について国有財産としての登録を終え、国有財産台帳への登録が完了しました。

林野庁が四十二島、国土交通省が十六島、海上保安庁が一島、環境省四十三島、財務省が百七十一島と、永続的かつ安定的な管理ができるよ

う各省をあげて努めていただきたいと思えます。

新渡戸稲造の『武士道』には、「国土とは、日本人にとり、単に金を掘り五穀を植えるためだけのものではない。神々と祖先の霊が宿る聖なる所なのである」との一説があります。

先人と共に生かされているという独特の領土観は、私達を長く幸せな気持ちで包んできたように思いません。海は、私達にとって、かけがえない恵みの母のような存在です。

当時最新鋭の巡視船であった「明治丸」に明治天皇がご乗船になり、百四十二年前の七月二十日に東北・北海道の御巡幸から横浜に帰港された日が「海の日」の由来です。

後世に名を残すこととなったイギリス生まれの美しい帆船に「明治丸」と名付けたのは、当時の工部卿であった伊藤博文でした。「明治丸」は日本の周囲に広がる海を航海し、

一八七五年にイギリスより二日前に小笠原に駆け付けたのです。この二日の差で、日本の小笠原領有が決定づけられたのです。

この歴史的な出来事がなければ、小笠原は他国の領有となっていたに違いありません。

その後の沖ノ島、南鳥島の領有を含め、日本は領海と合わせて世界的経済水域を確保することとなりました。その約三分の一に当たる約百五十万km²が東京都小笠原村に属しています。

「海の日」制定当初は、七月二十日でしたが、平成十五年の祝日法改正（ハッピーマンデー制度）によって、現在は、七月の第三月曜日に変更されてしまい、こんなにもロマン溢れるエピソードが子や孫の世代に伝わっていかなくなるのではと懸念しております。

海とともにある私達の日々の生活ですが、今日、温暖化による生態系の変化や海洋汚染、海上における海賊活動、排他的経済活動外での海底資源開発など様々な問題も抱えています。

これらを解決するためには、何よりも人材が要となります。海に無限の可能性を見出す若者たちを数多く輩出するために、産官学

が一体となって「未来の海 パイオニア育成プロジェクト」なるコンソーシアムを立ち上げました。二〇三〇年までに、海洋開発技術者の数を五倍の一人に引き上げるための仕組みづくりも始まりました。このコンソーシアムにより、大学では企業から派遣された講師が実践的な授業を展開し、企業が提供する実際の現場で実習も行います。

また、日本の大学院に世界で初となる海上保安政策の修士課程を新たに開設し、アジア各国から幹部候補生を受け入れるようになりました。国境を越え、世界の七つの海でつながる仲間とともに学び、研鑽していく場を日本自ら創りだしていかねばなりません。

わが国の海洋政策を担っていく次世代の若者たちに大いに期待したいと思えます。

よもの海 みなはらからと
思ふ世に など波風の
たちさわぐらむ

（明治天皇御製）

世界情勢が緊迫する今日ですが島国ニッポンの智慧を最大限にいかしつつ、海洋国日本の発展と七つの海でつながる世界の平和と繁栄を皆様とともに祈り続けてまいりたいと思えます。

山王祭

—日本三大祭—



江戸祭禮研究

山瀬 一男

描かれた江都の祭禮

江戸時代後期から明治・大正時代にかけて、多種多様の錦絵が版行されました。もちろん江都の祭禮も同様に錦絵として描かれ、応時の様子を視覚的に窺う手がかりとして、更には祭禮全体の研究対象の一部として貴重なものとなっています。江都の祭禮で錦絵に描かれたものは、後世天下祭と称された『山王祭』『神田祭』と『江都祇園祭（天王祭）』が圧倒的に多く、他の祭禮は全く見かけないと言っても過言ではありません。前述の祭禮は、江戸城下町を賑わせた大祭であり、この連載でも繰り返していますが、この三つの祭

禮こそが江戸三大祭りなのです。

今回は、江戸三大祭り祭禮絵の中でもあまり知られていない玩具絵等に焦点を当ててみます。

【立版古（組み上げ）】

立版古とは、錦絵に刷られた絵を切り組んで、細工を施しながら立体的に組み上げるもので、現在のペーパークラフト或いはプラモデルの原型とも言えるものです。

◎江戸山車の立版古

私の手元にある立版古は、山王祭の山車として、日本橋通四丁分『神功皇后』、小田原町『静御前』、日本橋檜物町『玉ノ井龍神』、日本橋本

町『弁財天』、本石町『浄妙坊一來法師』、駿河町『春日龍神』、箔屋町『佐々木四郎』、本材木町『源頼義』、元四日市『日本武尊』他で、神田祭の山車としては、『和布刈龍神』『関羽』『弁財天』『安宅の関』『飛騨匠』『白雉子』『鐘馗』『小鍛冶』『豊玉姫』『神武天皇』等です。

山車の型式としては、一本柱型、岩組型、三層せり上がり型で、江戸中期から幕末までの江戸山車を組み上げることができ、尚且つ山車の変遷を判別することができます。



※山王祭山車一覽万延元年（一八六〇）



※日本橋四丁目「神功皇后」文久二年（一八六二）

この一連の山車立版古を描いたのは歌川国芳の門人「歌川芳藤」で「よし藤」と号してその名が知られています。また、『玩具絵のよし藤』と

しても広く知られているのですが、玩具絵は子供のためのものであったので、実に遺された絵は少なく現在では大変貴重です。さらに申し上げると、芳藤の祭禮錦絵は大変精緻に描かれているため、後世我々の研究にとって貴重な資料となっております、ことに四枚綴りで描かれた「山王祭山車一覽」は、各町の山車が全て載つ

ており、それぞれの出し印・山車幕・山車型等の違いがひと目で解るものとなっております。

◎山車人形の立版古

前記の様に山車の立版古は、芳藤の作が多く知られていますが、芳藤以外が描いたものも少なからず現存しており、なかには非常に珍しい立版古が遺っています。

この左上の絵は、三代目原舟月が文久二年（一八六二）に製作した山車人形「鐘馗」（神田多町）です。

こちらは江戸名物・神田名物とも称された有名な人形ですが、この立版古が実に面白いのです。後の着せ替え人形の原点となるような絵です。

◎祭禮行列の立版古

立版古のなかには祭禮の様を描いたものもありました。珍しいものとしては、山王祭の山車行列が江戸城の内堀の橋を渡って入城する直前を著したものがありません。また、神田三天王祭（祇園祭）の中でも一番大きい祭禮であった小舟町天王祭を描

いた立版古も現存しています。これは小舟町の祭禮時の小舟町の街並みを著したもので、十枚綴りの立版古を組み上げると御飯屋からお宮道へと続く街並みがジオラマ型式にできるといふ壮大なものです。

【双六】

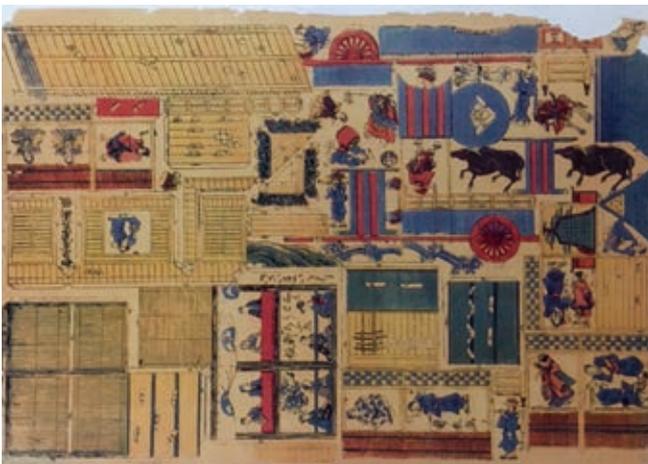
現在でも、特にお正月に楽しまれる双六。江戸時代の祭禮も、様々な双六になりました。山王祭と神田祭を併せた壮大な双六もありますが、ここでは明治期に最大と言われた神



※鐘馗の出し組上げ 明治十八年（一八八五）



※山王祭行列（製作年不明）





※大江戸の誇 神田祭山車四十番スタンプ集より
スタンプ二枚 昭和初期

田祭を双六にしたものを紹介します。この年、神田祭では各町が競い合って山車祭禮を行いました。振り出しが大傳馬町『諫鼓鶏』に始まり、四十三の山車が描かれていて、上がりには『神田神輿行列』になっています。

【燐票】

マッチラベルのことを燐票と言います。

ます。この燐票にも江戸名物の山車が描かれました。（昭和八年に山王祭十二種、神田祭十二種）それほど城下町の人達は、江戸の祭禮に誇りを持っていましたのでしよう。

【スタンプ集】

近年、御朱印を頂くための神社廻りがブームになっています。また、

様々なイベント等でスタンプラリーも催されています。戦前のいつ頃か年代かは不明ですが、神田祭スタンプ廻りがありました。神田の名店の広告付きではありますが、すべて集めると四十ヶ所以上に及ぶ見事なもので、神田の老舗のなかにはこの時のスタンプが現存しているとのこと。



日本橋住人記す

今回ご紹介したものを透して観えてくることは、現在よりも祭禮が様々な形で江戸庶民により奥深く浸透し、今の私達が楽しんでる事柄の原点が、既に江戸期から昭和初期にかけて出来上がっていたことに驚かされます。現在、世界中に日本のコスプレ文化が拡大されていますが、これも既に江都祭禮の「学び」という附祭（仮装行列）で盛んに行われていました。日本人は江戸の頃よりコスプレが大好きだったようです。附祭については、また別の機会に紹介したいと思います。

今に繁る文化を遺してくれた江戸の先人達を思うとき、私達が後世に残せるような事柄が、もつと祭禮を楽しみながら産み出せばよいと思っています。

奉祝山王まつり

略称敬不同順



(財)答礼会

会長 長田近衛

理事長 山田麻喜子



山王熱供給(株) 代表取締役 長 津 曲 荒 太 2口		永田町・霞ヶ関 平河町 3口		マネックス証券 松本 大 3口		(株)ぬ利彦 代表取締役 長 中澤彦七 3口		(株)高田装束店 加藤 充 則 5口					
(株)ジヨー・コーポレーション 代表取締役 堀切健司	(有)ナリタ美容室 代表取締役 成田弘子	(株)ミカミ 代表取締役 三神裕継	(株)ニュー・オートニ 代表取締役 長 大谷和彦	(株)泉屋東京店 代表取締役 長 泉 邦夫	麹町・紀尾井町 代表取締役 (株)植むらフーズ 十文字弘美		永田町 天竹 荻原秀夫	山王むらさき会 代表取締役 (株)アルファビデオ 青山裕生	(株)食文化総研 レストララン黒澤グループ 代表取締役 丸 總子	山の茶屋 遠藤恒夫	(株)ザ・キャピトルホテル東急 総支配人 末吉孝弘		
有楽町・美宝ビル 青山モリタビル 森田定亮	東宝(株) 名誉会長 松岡 功	大手町・丸の内 内幸町・有楽町 柴田哲義 恭代		(株)千修 代表取締役 長 下谷友康	(株)朝日写真ニュース社 代表取締役 阪田雅子	一般財団法人 不審菴 理事長 千 宗左	(資)清水隆商店 代表社員 清水昭治	三番町 田中康博	(株)伊勢半本店 代表取締役 長 澤田晴子		(株)桜井食品 代表取締役 長 桜井 勉	(株)ジャパングレーライン 代表取締役 眞下慶一郎	弁護士法人一審町総合法律事務所 代表社員 神崎浩昭
金子架設工業(株) 代表取締役 青木 茂	中西瀝青(株) 代表取締役 森口嘉子	木村實業(株) 代表取締役 長 木村平右衛門	川崎定徳(株) 川崎雄厚	(株)高島屋 常務取締役 亀岡恒方	日本橋ゆかり 野永喜一郎	東京建物(株) 代表取締役 社長執行役員 野村 均 2口	(株)東京會館 取締役社長 渡辺訓章		(株)帝国ホテル 取締役社長 定保英弥	TANAKAホールディングス(株) 代表取締役社長 執行役員 田苗 明	泉吉(株) 代表取締役 岸本昌子		

奉祝山王まつり

順不同敬称略

(株)キンザのサエグサ 取締役 三枝 進	新銀 (株)トミタ 代表取締役 長 富田 正一 橋座	清水建設(株) 取締役社長 井上 和幸	(株)大澤ローヤル 代表取締役 大澤 忠政	京 橋	エスビー食品(株) 代表取締役 長 小形 博行	いらよし証券(株) 代表執行役 長 小林 稔	(株)プレナス 代表取締役 塩井 辰男	(資)北見商店 代表社員 北見 まさこ 北見 丈夫 北見 芳夫	北見不動産(有) 代表取締役 長 北見 丈夫 北見 芳夫	八丁堀 茅場町・兜町 正金商事(株) 代表取締役 蛭原 宗久	(株)栄太樓總本舗 代表取締役 長 細田 眞	(株)小松ストア 代表取締役 小坂 敬	(株)木村商店 代表取締役 木村 暖子	(株)銀座木村家 代表取締役 木村 美貴子	(株)新橋玉木屋 代表取締役 田 卷 章子	(株)銀座吉田(株) 代表取締役 吉田 民雄	銀座越後屋 八代目 永井 甚右衛門	(株)銀座ナイシ 代表取締役 長 柴田 孝則	(株)小林傳次郎中央地所部 代表取締役 小林 久子	やす幸 石原 壽 松井 俊樹	(株)ホツタ 取締役社長 堀田 峰明	崇敬者(氏子外)	(株)錦屋マリエマリエ 取締役社長 勝田 久美子	(株)フエム 代表取締役 藤田 誠	(株)兵左衛門 代表取締役 長 浦谷 兵剛	(株)キヨウエイアドインターナショナル 代表取締役 長 松岡 雅昭	(株)アーバネットコーポレーション 代表取締役 長 服部 信治	(株)井筒装束店 代表取締役 長 浅田 茂樹	(株)木村屋總本店 代表取締役 長 木村 光伯	(株)糟谷 相談役 糟谷 孝男	(株)ホツトアート 代表取締役 望月 秀峻	鈴木徹章工芸(株) 取締役会長 鈴木 健之	(株)なだ方 代表取締役 長 野原 優	京橋大根河岸会 長 鈴木 敏行	(株)信英堂 代表取締役 桜井 俊一	有楽商事(株) 代表取締役 平沼 顕司	(株)ナンシン 代表取締役 長 齋藤 信房	裏千家 今日庵 千 玄室 宗室	きねや足袋(株) 代表取締役 中澤 貴之	富士産業(株) 代表取締役 中村 勝彦	廣田特許事務所 代表 廣田 雅紀	(株)錦豊琳 代表取締役 鈴木 光良	(株)丸井スズキ 代表取締役 鈴木 貴博	酒は、これを神々に献り、その撤下をいたたく事によって、うつうつとした 気持が晴れやかになる百葉の長です。当日枝神社の御祭神大山咋神は、古来、 酒を司らせ給う東都の酒神と厚く信仰せられるところであります。	新 政 酒 造 (株) 秋 田 酒 造 (株) 沢 田 酒 造 (株) 盛 田 酒 造 (株) 大 関 酒 造 (株) 賀 茂 酒 造 (株) ヤマサ醤油(株) 濱 田 酒 造 (株) 小 西 酒 造 (株) 宝 酒 造 (株) 雲 海 酒 造 (株) 薩 摩 酒 造 (株) 霧 島 酒 造 (株) 辰 馬 酒 造 (株) ヒガシマル醤油(株) 白 鷹 酒 造 (株) キン シ 酒 造 (株) 菊 正 酒 造 (株) 月 桂 酒 造 (株) 富 久 酒 造 (株)	福 徳 酒 造 (株) 白 鶴 酒 造 (株) 中 川 酒 造 (株) 吉 乃 酒 造 (株) 太 田 酒 造 (株) 黄 桜 酒 造 (株) (株)ちくま 江 山 酒 造 (株) 江 川 酒 造 (株) 桃 川 酒 造 (株) 豊 島 酒 造 (株) 田 村 酒 造 (株) 石 川 酒 造 (株) 南 金 井 酒 造 (株) 鍋 島 酒 造 (株) 木 戸 酒 造 (株) (株)久長本 天 鷹 酒 造 (株) 高 山 酒 造 (株) 近 藤 酒 造 (株) 大 信 州 酒 造 (株) 七 笑 酒 造 (株)	山 梨 酒 造 (株) 山 土 井 酒 造 (株) 岩 村 酒 造 (株) 岩 心 酒 造 (株) (株)山根本 醉 心 酒 造 (株) (株)今田本 醉 鯨 酒 造 (株) 土 佐 酒 造 (株) 土 佐 酒 造 (株) 林 龍 平 酒 造 (株) 千 代 酒 造 (株) 千 代 酒 造 (株) 林 龍 平 酒 造 (株)	朝日総業(株) 代表取締役 池本 なぎさ	安全自動車(株) 代表取締役 中谷 宗平	日本ビダヤコム(株) 代表取締役 長 東郷 英二	総合建設業 (株)CMC 代表取締役 高橋 悦郎	(株)ミロク情報サービス 代表取締役 長 是枝 周樹	(株)フオーシーズ 代表取締役 会長兼CEO 浅野 秀則
-------------------------	--	------------------------	--------------------------	----------------------	-------------------------------	------------------------------	------------------------	--	---------------------------------------	---	------------------------------	------------------------	------------------------	--------------------------	--------------------------	---------------------------	----------------------	------------------------------	------------------------------	----------------------	-----------------------	-----------------	-----------------------------	----------------------	-----------------------------	---	---------------------------------------	------------------------------	-------------------------------	--------------------	--------------------------	--------------------------	---------------------------	--------------------	-----------------------	------------------------	-----------------------------	--------------------	-------------------------	------------------------	---------------------	-----------------------	-------------------------	---	---	--	---	-------------------------	-------------------------	--------------------------------	--------------------------------	----------------------------------	------------------------------------

平成二十九年正月献酒醸造元芳名(順不同・敬称略)

文化十一年山王祭当番町記録

— 國學院大學図書館蔵史料 —

武蔵大学 教授 福原敏男

江戸中後期の山王祭の実態を知る

には祭礼番付を調べることが最善である。まれに氏子の祭礼当番町が記した記録が伝来していることがある(例えば、拙著『江戸の祭礼屋台と山車絵巻―神田祭と山王祭―』渡辺出版、二〇一五年を参照)。今回紹介する史料は國學院大學図書館蔵「山王御祭礼附祭并一式控」(同館宮地直一文庫蔵、所蔵番号B4-6-1087)である。紙本墨書縦冊一冊、縦二三・九、横一六・九センチメートル、後補表紙・元表紙と六十六丁より成る写本である。筆者は『武蔵大学人文学会雑誌』(第四八巻第二号、二〇一七年)において、同書表題より「文化十一年(一八一四)山王御祭礼附祭共一切控 岩附町」と題して全文を翻刻している。

同年の山王祭は六月十四・十五日

(西暦一八一四年七月三十・三十一日)の盛夏の祭りであり、本史料は祭日を中心としつつも、その準備も含めた山王祭第七番組の詳細な記録である。この年には第七番組以外にも二組、計三組が附祭を出している

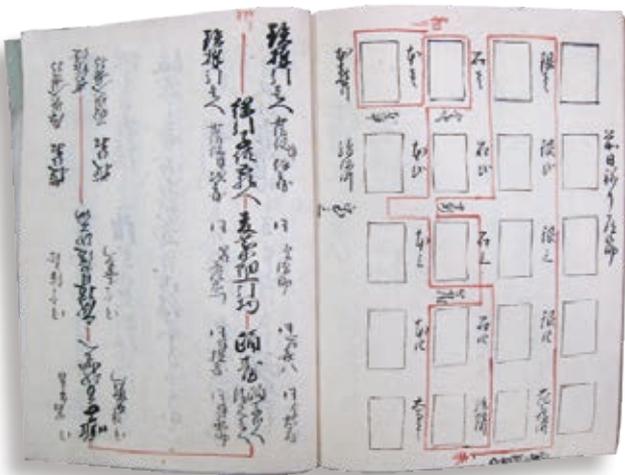
が、本書前半部は町年寄奈良屋役所より三組の町々に対する、祭礼における規則諸事の申し渡しを中心であり、後半は会計帳簿(支出)となっている。確認できる限り近世中期以降、同祭において氏子は四十五組の山車番組に編成され、各組より一本以上の山車を出し、神田祭と隔年に毎回五十本程(以上)の山車が巡行した。仮装行列、舞踊、移動舞台上の囃子や芝居などから成る附祭も、同番組町より出されている。本史料は以下の七カ町より構成された第七番組の

記録であり、岩附町(現中央区日本橋三丁目付近、以下「現中央区」を略す)居住の町名主益田文左衛門によつて記されたものである(実際の記主は複数)。岩附町以外は本町一丁目(日本橋本石町二―三丁目付近)、二丁目(日本橋室町二―三丁目付近)、本町三丁目(日本橋室町二―三丁目・日本橋本町二―三丁目付近)、四丁目(日本橋本町二―三丁目付近)、本革屋町(日本橋二丁目・日本橋室町二丁目付近)、金吹町(日本橋本石町三丁目・日本橋室町三丁目付近)の六カ町である。

文化十一年、第七番組としては定番の弁才天人形を巡行したが、本史料で特筆すべきは人形屋清七が請け負つて修理している点である。山車に加え、本革屋町を附祭の年番(世話)町として、山車行列第三番と四番の間に附祭を出した。実は、同年三月、七カ町の居附地主たちは、度々御役所(町年寄)へ附祭免除を願い出たが断られた。さらに、踊台一台(二組)のみにしたいと申し出たものの、それも許可されなかった。そこで、本町一・二丁目で一組、同三・四丁目

で一組、本革屋町・金吹町・岩附町

で一組、の三組を出すことで決着した。附祭は、本町一・二丁目の花小山車(七福神持道具)と地引網の引物(緋縮緬)、蛸の学び地走り踊(蛸と漁師一人ずつ)、本町三・四丁目は花小山車(亀の上に岩組の飾り)と相州江ノ嶋風景の学び(貝拾い地走り踊・踊娘七人と囃子方男十七人)、本革屋町・金吹町・岩附町は花小山車(麦藁細工の学、岩組に梅松、笛・笠・貝屏風その他品々飾付)・小万度・引物であった。さらに、本革屋町以外の六カ町の附祭として、浜松風の



学び踊家（屋）台において、踊子供二人、囃子方二十一人が出演した。

同史料には「前日ねり道筋」として、六月十四日における第七山車番組町による附祭自町練りの順路略図が描かれており、同種図は類例が少ない貴重な地図と思われる。この行列は鉄棒引二人が先導し、綱引子供五十人が麦藁細工引物を引き、本草屋町・金吹町・岩附町の世話役四人が付く。次に浜松風の学び踊家台が続く。次に金吹町・金吹町の世話役が付く。次に、囃子方二十一人による底抜日覆（屋台）二荷が続く、本草屋町・金吹町・岩附町の世話役四人が付く。最後に挟箱・道具入長持各二と世話役が行列する。

図の説明をみると、現在の中央区、江戸の町人町の中心部であり、この六十二丁裏（右側）の上が西、左が南で「室三」（室町三丁目）の直ぐ南の同一丁目は日本橋袂に位置している。練り道筋には朱線が引かれ、上の「本老」（本町二丁目）の西が「初り」である。ここは山王祭・神田祭において、神輿渡御以外の附祭などが解散する江戸城常盤橋御門の東である。下は東であり、大傳馬塩町と

鉄砲町の東「牢屋敷」（囚獄）前で前日の練りは終了する。行列の南限は本両替町、北限は「銀老・二・三・四」の本銀町、東北隅が大傳馬塩町、東南隅が「大馬老」の大傳馬町一丁目である。「石老・二・三・四」は本石町、「本老・二・三・四」は本町、本石町一・二丁目と本町一・二丁目の間には金吹町、本石町二・三丁目と本町二・三丁目の間には十軒（店）、本石町三・四丁目と本町三・四丁目の間には岩附町、本両替町の東には駿河町が位置している。この第七番組の練りは、同番組構成町以外に本銀町・大傳馬塩町・大傳馬町一丁目・鉄砲町・本石町・十軒店・本両替町をも巡行していたのである。



山王祭 祭事のご紹介

山王嘉祥祭（和菓子の祭）

六月十六日午前十一時

六月十六日は「嘉祥」と言って仁明天皇が嘉祥元年（八四八）神託により、十六種の神供（餅、糖菓子、水菓子）を献じ、疫病退散を祈願したのが始まりと言われています。

また、嘉祥菓子は、鎌倉時代に始まったと言われ、江戸時代には嘉定（祥）通宝の嘉通が勝つに通じる故を以って縁起を喜ばれ、嘉定通宝十六文で食物を求めて食し、これを「嘉祥の御祝儀」と呼びました。

この行事は武家の年中行事として広まり、徳川将軍家ではこの日、御目見以上の諸士を江戸城大広間に集めて謁見し、嘉祥菓子を給りました。これを「嘉祥頂戴」と言いました。日枝神社では、徳川将軍家の産土神であり、嘉祥の御祝儀の六月十六日が山王祭期間中に当たることから「嘉祥祭」を行い、美しい日本の気候風土の中で作られ、賞味してきた「伝統的和菓子」を神前に献じ、万民の「疫難退散」と「健康招福」を祈ります。

当日は、東京和菓子協会の技術者が「菓子司」として神前にて和菓子（煉切）を作り奉納します。

大前で披露される伝統の技をどうぞご覧下さい。



神前にて奉仕する菓子司



神前にお供えされた嘉祥菓子

第五十三回
奉納書初展

正月恒例の書初展は奉納作品を正月期間（二月十五日迄）境内に展示しました。

一月六日午後二時より社殿にて奉告祭を執り行い、引き続き参集殿にて山王奉書会を開催しました。

表彰者は下記の通りです。



山王奉書会
(参集殿にて)

第五十三回 山王奉書会
表彰者芳名（順不同）

宮司賞

和洋九段女子中学校

栗田百々佳様

氏子崇敬会長賞

月島第三小学校

石井 大輔様

秀作

一番町小学校

鈴木 大晴様

番町小学校

史 悦理様

九段小学校

今西 弘毅様

泰明小学校

岩淵れいな様

港南小学校

白岩 凜音様

港南小学校

森川 里咲様

三輪田学園中学校

松尾 万桜様

麴町学園女子中学校

秋元 俊慧様

山脇学園中学校

箸本 里菜様

上石神井中学校

中嶋 春香様

宮司賞をいただいて

和洋九段女子中学校二年 栗田 百々佳

澄心静慮
和洋九段女子中学校 二年 栗田百々佳 宮司賞

第五十三回日枝神社奉納書初展において、宮司賞をいただいても感謝しています。有り難うございます。

私が初めて書道を体験したのは、小学校三年生の頃です。筆を初めて持つて、字を書いた時は、鉛筆とは違うので、とても書きづらく、あまり好きになれそうにありませんでした。

書道が楽しいと思い始めたのは小学五年生の時でした。筆遣いにも慣れたので、始めは鉛筆と違うから嫌だったのですが、その頃には、鉛筆と違うから楽しいと思うようになりました。

中学校に入學し、書道部に入ったのは、自分の字をさらに練習を重ねてみたくと、書道が楽しいと思うようになったからです。

今回、奉納書初展に出させてい

いただいた字は、自分で決めて、顧問の先生にご指導をお願いしました。今の私では、少しハードルが高いと感じましたが、思い切った挑戦してみました。

練習を開始したのは昨年の九月十月頃でした。半紙で練習を始めましたが、思うように字が書けませんでした。少しずつ練習して、一文字、二文字、丁寧に練習しました。心が折れかけた時もありましたが、やっとの思いで、半切に練習し始めました。墨の量や字の大きさやバランス、字と字の間隔のとり方などが難しいということが分かりました。練習を積み重ねていくうちに、だんだんとコツをつかんできたので、冬休みにさらに字をみがきました。一番苦戦したのは最後の二文字です。画数が多いのもありましたが、字の大

きさ、一画一画の線の太さや長さなどが一番難しかったです。半切で字を書くのは初めてだったので、書きにくい所はあったのですが、なんとか作品を完成させました。

作品は、本題の字だけではなく、名前まで集中して書いたため、やり遂げた時は今までのよりも沢山の達成感がありました。達成感はありませんでしたが、まさか宮司賞がいただけるとは思いませんでした。

今後はさらに精進していきたいと思います。新しい書体にも挑戦していこうと思います。また、これからも、部活のみんなや先生と楽しながら書道を楽しもうと思います。

今回は宮司賞をいただき、本当にありがとうございました。

氏子崇敬会長賞をいただいて

中央区立月島第三小学校 石井 大輔

新春の光
月島第三小学校 五年 石井大輔 氏子崇敬会長賞

「やったー」これがぼくが氏子崇敬会長賞というすばらしい賞をいただいたことがわかった時の正直な気持ちでした。数多くの作品の中から選んでいただきありがとうございます。

ぼくは、「新春の光」という言葉を選びましたが、それは見たところ全体のバランスが取りやすそうに思えたからです。ところが、実際はとても難しく、何回も練習して自分が納得いくまでがんばって

書き続けました。

今は、ぼくを選んでくれて応援してくださいました先生またぼくが習っている書道の先生に感謝しています。

書道は、小学校二年生のころからはじめました。時にはいきたくないときもありましたが、先生が優しく教えてくださったおかげで今まで書道が続けることができました。また今回の賞につながったと思います。

四月からは最高学年の六年生になります。一年生から五年生の後はいの仲間にも、今回学んだことを伝えることに努め、ぼく自身も書道がもっとうまくなっていけるよう、頑張ります。

万葉の歌 — 手習と恋と永遠 —

講師 慶應義塾大学文学部名誉教授 藤原茂樹 先生

今回は短い時間の中で、二〇〇八年から二〇一三年にかけてNHKで毎日流れていた日めくり万葉集という番組のDVDをお見せしながらお話をしたいと思います。

万葉集というのはとても大きな歌集で、全部で四五一六首あり、通し番号が振られています。巻物になっていて全部で二十本あったので、二十巻です。一巻から二十巻まで順番に出来た訳ではないのですが、だいたい一巻目と二巻目は古いと言われています。その一番始めの歌は、雄略天皇という五世紀頃の天皇の「籠もよ御籠持ち」という歌で、これは求婚いわば恋の歌です。最後の歌は「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしきよごと」というものです。「いや」というのは励ますようなことばであまり意味のないもので、「しけ」というのはしきりに、どんだん、という意味です。「よごと」の意味とは二つ説があって、良い言葉という説と、良い事という説です。そもそも古い時代は事と言葉は意味があまり分離されずに使われていました。今でも「受験のときに悪いことを言わないように」と良い事が起こるような気がする」ということがありますが、言葉と事はくっついているというのが古い人の考え方です。今日ここで国歌を皆さんと歌うことができまして、これはもともと古今集の歌がベースで、千代に八千代にというのには八千、八千とすることですね。この歌は永遠ということ詠っていますので、日本人は万葉の時代から今に至るまで永遠というものを望んでいるということが分かります。

万葉集の「新しき年の初めの初春の」というのは正月の元旦の歌ですが、万葉集四五一六首の中で元旦の歌はたったこれ一つしかありません。それが巻二十、四五二六番という、最後に来ています。これはとても不思議な謎で、なぜ元旦の歌が一首しかないのにそれが最後なのか、これは誰も解き明かしていません。国歌の話をもう少ししますと、「千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」、最後は苔がむすということなので、苔がむすのはきつといいことなんだろう、ということがわかります。巖は大きな岩石、さざれ石は漢字で書くところ「細石」、あるいは「細石」、小さな石が千八千、八千、あるいは千の時代、八千の時代経ってだんだんと大きくなって巖になり、さらに苔がむすまでこの世界が永遠であって欲しい、そういう歌が日本の国歌なのです。君が代というのは天皇の代のこと、つまり私たちの世界のことです。この世の中が永遠性を保ちながら、最後には苔がむすほどずっと幸福であってほしい、繁栄してほしいという歌です。新しき年の初めの初春に雪が降っている、その雪が降り積もるようにいいことが、またいい言葉が、どんどん訪れるようにというとても良い歌なのでご紹介しました。

さて今回副題に「手習いと恋と永遠」と付けました。皆さんが書道の達人、もしくは書道の達人になって行く素質を沢山持つていらつしやる方々だと伺ったので、何か文字に関わる事をお話ししたくてはいけなれないと思ひ手習いと入れました。万葉の時代に書「道」というのはまだありませんでしたが、書そのものはありました。特に有名なのは「楽毅論」という中国の書物を光明皇后が書き写したものです。楽毅論というのは王羲之が中国の東晋の時代に書いた物なので、万葉の時代には文字を書くという習慣が天皇や貴族の間に入ってきていて、それが今の皆様のところまで続いているのだらうということとも言えると思います。万葉集から一〇〇年程経った頃にできた古今和歌集の仮名序の中に、「手習い」という言葉が出てきます。王仁という人が作った「難波津に咲くや木の花冬こもりいまは春べと咲くや木の花」との歌と、陸奥の采女が作った「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」の歌について、「この二歌は歌の父母のやうにてぞ、手習ふ人のはじめにもしける」とあります。「安積山」の歌は女性の詠った物なので、おそらく「難波津」の歌が父で、「安積山」の歌が母かな、と思います。ところが不思議なことに、難波津の歌は万葉集の方には残っておらず、安積山の方は古今集に残っています。

昔の伝票のような役割をしていた古い木簡を見てみると、「難波津」の歌が書かれている物が出て、それが全国から十数例出ています。安積山の方は一つしか出てきていませんが、ともあれ、当時の役人関係の人たちがいたずら書きをするときに、「難波津」の歌を書いている、だから日本の書道の始まりは「難波津」の歌だろう、ということになるのです。当時ひらがなもカタカナも発明されていないので、何か自分たちの気持ちを書こうとしたときにどうすればいいのか、ひらがながないから困ってしまいました。中国から漢字を借りてきて、漢字で自分たちの言葉を当てはめていくという苦労を随分したようです。その工夫の例として、

寒過 暖来良思 朝鳥指
津鹿能山尔 霞軽引
「冬すきて春来たるらし朝日さす
春日の山に霞たなびく」



の字を借りて「てし」と読ませた)

中でも王羲之という中国の人を尊敬していたということがよくわかります。王羲之の羲之をてしと読む例は他にも沢山あり、皆この字を用いています。

二つ目に恋の歌ですが、先ほど「籠もよ御籠持ち」の話をしたように、万葉集の一番始めに男性が野原で若菜を摘んでいる女性に求婚する歌が載っているわけですから、万葉集というのはお固い歌の集ではなく、柔らかい歌の集であると思つて頂ければ良いと思います。

人間にとつて恋というのは、これは結婚と言つてもいいですが、非常に大切なことです。男性と女性が出会つて子孫を残していくということがとても大事なことになるので、万葉集には恋が多く歌われているのです。ここで紹介するのは恋の歌の中でも、結婚したての男女の恋の歌です。中臣朝臣家守という神祇伯(宮廷の中で神様にお仕えしていた役人)と狭野弟上娘子が結婚をしたのですが、何の理由か中臣家守は逮捕されて島流しになつてしまします。夫婦が別れ別れになつてしまつて、全部で六十三首やり取りをした歌が残っていますが、そのとき女性が憤つて、あるいは悲しんで詠んだ歌があるので、紹介します。

「君が行く道の長手を繰り畳ね
焼き滅ぼさむ天の火もがも」

「もがも」というのは願望、くであつたらしいなという意味です。あなたが出かけて行く長い道のりをたぐり寄せてたたくてしまつて、焼いてしまいたい、それを滅ぼしてしまえば彼との距離は短くなるのに、という意味です。片方は罪人で会えないわけですから、ずっと離ればなれでいつになつたら会えるか分からないような状況です。引き裂かれた男女が、道を畳んで滅ぼしてしまふ、そういう天からの裁きの火に道を焼いてほしいという心を詠んだ情熱的な歌です。

万葉集では人が人に恋するという歌が沢山残つていて、それがとても大切なところなのです。考古学ではもつと古い物が出てくるけれども、人が何を考えていたかという事までは分かりません。万葉集の場合は天皇から普通の方達までそれぞれの歌が残つていて、何を感じていたか残っているのが面白いところ。そしてその歌を集めていくと、恋の歌が多いのです。

そして全編にわたつていっているのは、先ほどの「新しき」の歌のような「永遠」という観念です。いついつまでもこうあつてほしい、またはいつまでも今のようであつてほしいと考えていました。昔の人はもつと良くなると思つていました。昔の人は一番良いと思つていたので、今がずっと続くように願つていました。昔の人がどのような時の観念をもつていたかが垣間見られる歌を一つ選びました。

「一つ松幾代か経ぬる吹く風の
声の清きは 年深みかも」

少し前置きをしますと、今の私たちは植物にあまり興味を持ちません。今日神社に参拝した時に玉串を差し上げました。あれは榊です。榊というのは木偏に神と書くので、神様と最も関係の深い木です。東京は寒いので山の中に榊が自生しているという事はないので、家庭で榊様をおまつりする場合は榊と、葉緑植物という木で、こういうものを日本人はもつと大切に、そこに神様を感じたのです。同時に松、これは針葉樹ですが常に青く永遠を感じる物なので、非常に大切に考えていました。私たちは植物というときまず花を感じてしまいます。万葉時代の人は花を感じないかという事ではありませんが、どうもそれだけではないらしい。万葉集に出てくる植物の歌数の順位では、一番が萩、二番が梅で、以下ぬばたま、松、橘など、花の咲かな

いものはないですが、五番目六番目には葦とか菅とか、そんなものがでてきて、桜は八位で、ベスト10には入っています。万葉の人は桜が好きではなかったかという事や、はがりが一番好きだったかという事思つていのですが、歌の順番からいくとこのようになつていて、その中には今の人はあまり興味を持たないぬばたまとか松とか葦とか菅が入つていて。これは万葉時代の人たちと現代の人たちの感覚がちよつと違つたんだろうという事です。万葉集を読んだり、何か古い物を読むときは、昔の人と今の私たちの違うところ、今の私たちが昔の人たちのどこか通じているところを自分で分析しながら読み取つていくと、色々な物が豊かに感じられるようになると思います。

万葉の人たちが歌を詠むとき、つい目にして口に出してしまうものが植物だったので。万葉集四五一六首のうち植物の歌は一七〇〇首、つまり三分の一以上植物が詠われています。今の私たちにそのような感覚はないですね。何か自分の心を言いたいと思つたときにすぐには言えずに、何かそばにある植物を歌つているうちに自分の気持ちが出てくる、こういうやり方が昔の人の歌い方だったようです。

常緑樹である松をどうして万葉の人々がベスト4に入れたのかというと、これは松に対する尊敬心があったからです。何がその当時の人を惹き付けたのか一言で言うと、人間より長く生きていくという事でしよう。人間とは儂い物だという事はみんな知っていますから、人間より長く生きていく物がどういう存在なのかということになりました。例えば岩や樹木、山や海や川などの自然、そういう物にも人々は目を向けていたと思います。

最後に紹介する歌は「一つ松」の歌で、「幾代か経ぬる」、ここに先ほど国歌にも出てきた千代に八千代にの「代」が

入つていますが、いったいどのくらいの時代、年代を松が過ごしているのだろうか、と思つたのです。活道の丘という場所に貴族達が登つて松の下でみんな宴会をしているとき、市原王という人が耳をすますと松の間を抜ける風の音がする。これを松籟といいますが、その風の音を聞く心が清らかならなつて耳が透き通つた感じになり、自分が透明な世界に近づいているような感じがする。そこで、吹く風の音が清らかなのはなぜだろう、それは年が深いからだ、という事になる訳です。

私たちは時間というのは矢のように過ぎ去つて行くものと思つています。しかし古い時代の人はどうも時間を輪のように動いていると捉えていたようです。これが一般的な世界全体での考え方ですが、万葉の時代の人はこの松の中に年が深まつていると感じたようです。年が深いから、松の枝を通り過ぎる風の音が私の心に沁み入つてくるのだらう、という風に考えているらしいのです。これが「年深みかも」です。矢のように通り過ぎる時間や輪のように回つてくる時間とは違って、市原王は松が時間を蓄えていて、非常に風の音が清らかに聞こえてくる、人の心に染み通るような、あるいはこの世界を清めるような、そういう音に聞こえてくるという考え方をしています。こういう感じ方を私たちはもう忘れていますが、この歌を聞くと何となく思い出すような気になりますね。そういうところが万葉の歌の良いところです。

万葉集の万葉というのは永遠、万の代という意味です。万葉の語源は万代の言葉という説もありますが、千数百年前の人たちの思いがいつまでも続いて、後の人が理解してくれるようにという願いがあつたのだと思つています。

今日参加してくれた皆さんのこれから千代に八千代に、そして万代に続くように祈つて、話を終わりにします。

山王祭 祭事のご紹介

撰社祭

六月十三日 午前十一時～

山王祭は二年一度、氏子各町を鳳輦、神輿が渡御する「神幸祭」を執り行います。神幸祭のある年を「本祭」といい、行われない年を「陰祭」といいます。本年は陰祭にあたり、神幸祭は行いませんが、「山王御旅所」と呼ばれた撰社にて祭典を執り行います。



撰社日枝神社は天正十八年（一五九〇）徳川家康公が江戸城に入城、日枝大神を崇敬されて以来、御旅所の存する「八丁堀北嶋（鎧島）祓所」まで神輿が船で神幸された事に始まります。

寛政十二年（一八〇〇）の江戸名所図会巻二では、神主樹下氏持ちの山王宮と別当観理院持ちの山王権現の遙拝の社が並び建ち、隔年六月十五日の山王祭の際は、この二社の手前に仮殿が設けられ、永田馬場の本社からの神輿三基を中心とする供奉行列の神幸があり、実には大江戸第一の大祀にして壮観であったと伝えられています。

境内地には天満宮、稲荷社、浅間社のほか、山王の本地とされる薬師堂や閻魔堂も建立され、縁日や勧進相撲も行われていました。明治元年神仏分離令により薬師堂と同別当智泉院の敷地は境内から分離



されました。明治十年に山王宮は無格社日枝神社に、大正四年には本社の官幣大社昇格に伴い撰社日枝神社と改称されました。現在の社殿は大正十二年九月の関東大震災後、昭和三年に造営され、境内末社（北野神社・稲荷神社・浅間神社）が合祀されました。昭和二十年三月の東京大空襲により罹災しましたが、直ちに補修を行い、昭和四十一年に御屋根葺替と大修理を加えました。平成二十二年には再び、老朽化した社殿に外装工事を施し今日に至ります。

山王祭 神賑行事紹介

山王音頭と民踊大会

六月十三日～十五日 午後六時より

献灯祭並に山王音頭と民踊大会では普段は静かな境内に奉納提灯が所狭しと掲げられ、明々と照り映える中で太鼓の音も楽しく開催されます。

初心者でも踊れる楽しい歌と踊り、近隣から浴衣がけの方も沢山来ます。テントの中に「やぐら」を建てるので雨天決行。期間中楽しい夜店も出ます。



御神米づくり 田植祭

去る四月三十日(日)、恒例となりました御神米づくり・田植祭のため、遠藤治雄奉賛青年会幹事長(耕作長)をはじめ総員二十九名で、御神田地(千葉県香取市)へ出向しました。

大神様の御加護を賜り、天候にも恵まれ、祭典を滞りなく斎行した後、田植奉仕を致しました。

なお、稲刈りは八月下旬を予定しています。



篤志奉納

神楽鈴

畑 照子 殿
畑 美枝子 殿

平成二十九年二月十七日奉納

山王台通信

神社本庁辞令

片山 徹

日枝神社権禰宜に任ずる(平成二十九年四月一日付)

新入職員紹介

〔嘱託〕 坂本 美雪 (平成二十九年二月一日付)

〔祭祀職〕 鈴木 善明 静岡県出身

〔出仕〕 千葉 統彦 千葉県出身
國學院大學大学院文学研究科
神道学・宗教学専攻修了

〔出仕〕 榎本 圭佑 埼玉県出身
國學院大學神道文化学部卒

〔巫女〕 門田穂乃華 北海道出身
北海道釧路明輝高等学校卒

〔巫女〕 藤井 優恵 千葉県出身
日本外国語専門学校
キャンピングアテンダント・
エアライン科卒

〔巫女〕 松元 絢香 神奈川県出身
駒沢女子大学人文学部卒

〔巫女〕 吉田 真理 岩手県出身
国立音楽大学卒

〔巫女〕 川浪 寧々 神奈川県出身
神奈川県立厚木商業高等学校
情報処理科卒

〔巫女〕 樋口 璃子 千葉県出身
習志野市立習志野高等学校卒

〔実習生〕 前川 大成 宮城県出身
國學院大學神道文化学部在学

〔実習生〕 佐藤 生萌 熊本県出身
國學院大學神道文化学部在学

〔実習生〕 菊池香菜子 宮城県出身
國學院大學神道文化学部在学

〔録事〕 宮本 奈央

〔嘱託〕 久保田文雄

〔嘱託〕 土橋 秀行
〔技師〕 村山 義和

(平成二十九年四月一日付)

〈通巻百三十号〉

発行 平成二十九年六月一日
編集 日枝神社社務所

東京都千代田区永田町二丁目十番五号
(郵便番号 一〇〇・〇〇二四)
TEL 〇三・三五八一・二四七一(代表)
FAX 〇三・三五八一・二〇七七
<http://www.hiejinja.net/>

山王祭事暦

緑蔭朝詣りとラジオ体操の集い

七月二十日(木)

～

八月三十一日(木)

善感謝祭

八月四日(金) 午前十時半

七五三詣

九月一日から承ります

敬老祭

九月十八日(月) 午後二時

山王祖霊祭

九月二十日(水) 午前十一時

新嘗祭

十一月二十三日(木) 午前十時半



予告

中秋管絃祭 (第五十回)

十月四日(水) 午後六時

中秋のひととき、内庭にて古式ゆかしい伝統芸能「雅楽」を心ゆくまでご鑑賞下さい。

管絃 新羅陵王急

嘉辰

神楽舞 四方拝

浦安の舞

日枝の舞

舞楽 小野雅楽会奉仕



日枝神社奉賛青年会



富士登拝 参加ご案内

隔年に実施される「富士登拝」は奉賛青年会の行事にあつて、希望者も多く、左記により行われますが、定員になり次第、締切らせて頂きますのでご了承下さい。

日時

平成二十九年七月

二十九日(土) 三十日(日)

を予定

お問い合わせ

日枝神社奉賛青年会

〇三(三五八)二四七一

Bridal Fair 総合婚礼展示会

●平成29年7月22日(土) 10:00~18:00

●平成29年7月23日(日) 10:00~17:00

婚礼相談、館内や境内の見学、披露宴会場見学、衣裳展示、試着、引出物、引菓子展示ほか

日枝神社 結婚式場 **日枝** あかさか

東京都千代田区永田町2丁目10番5号
TEL.03-3502-2205 FAX.03-3502-8948
<http://www.hieakasaka.net/>



©わたせせいぞう